

教 育 長 様

校番 43 日彰館 高等学校長

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校
平成30年度 報告書****研究の概要****研究の目標（※計画書に記載したものを再掲）**

学校全体で育成する「資質・能力」を明確にし、総合的な学習の時間を中心とした「のめりこむ学び」や「田舎主義評価」の具体的な実践を通して課題を明らかにする。

研究内容（※対象，時期，方法を含む）

○総合的な学習の時間等における「探究的な学習」の充実について

「のめりこむ学び」を実践するために、次の3点の工夫をした。

(1) 3年間の学びに見通しを持たせ、日彰館で学ぶ意義を感じさせる場の設定

全学年を対象とした総合的な学習の時間の合同授業を行った。7月には昨年度の研究に係る体験談・失敗談を3年生が2年生、2年生が1年生に、12月には今年度の研究の成果を他学年に、グループ内でポスターを用いて伝えた。こうしたことから、「いま、ここで」学ぶ意義と、「これから、どこで」生きることを志すのかを考え、内発的な学習意欲を高めた。

(2) 学校行事と連動した横断的な学び

1年生は地域研究でまとめたことを、国際交流行事「吉舎おもてなしプラン」で留学生に英語で伝え、2年生は異文化比較研究で設定した課題について、台湾研修旅行を通して現地の文化を感じながら情報収集をした。その際には、英語の授業での翻訳活動ややりとりを継続するためのコミュニケーション能力をはじめ、地歴公民科等での異なる文化を受け入れる姿勢や歴史的な知識等、教科学習とのつながりを持たせ、学びの真正性を感じさせるカリキュラムを設計し実践した。

(3) 生徒の主体性を引き出すプロジェクト学習の実践

1学年の国際交流行事「吉舎おもてなしプラン」に向けて、「何のために何を成し遂げるのか?」といったビジョン・ゴール設定から、計画、情報・解決策、制作、再構築、プレゼンテーション、成長確認までのフェーズで単元構成をし、総合的な学習の時間の地域研究を行った。

○資質・能力の評価について

「田舎主義評価」を構築するために、次の3点の工夫をした。

(1) 生徒による自己評価を促す仕掛けとしての資質・能力ワークシート

各学年会、管理職から生徒に身に付けさせたい力として出し合った意見から日彰館版資質・能力を設定した。これは、吉舎版資質・能力として吉舎学区小中高12年間のものとする構想に向かっている。ルーブリックを作成し、生徒が授業の際に振り返りワークシートとして活用し、教員もそれをもとに生徒を見とり、生徒と教員のコミュニケーションツールとした。なお、生徒の学びの可能性を制限しないよう、ルーブリックの4段階の最も高い段階については固定しないこととした。

(2) 生徒の活動をより深く見とるシステムづくり

研究授業をする際には、事前にどの参観教員がどの生徒の活動を見とるのか配置を決め、参観教員は特定の生徒の活動を記録した。その際には、参観教員は前述したワークシートを生徒の活動を見とるための評価に、生徒は振り返り自己評価として活用した。研究授業後の研修では、教員と生徒の評価の相違を教員間で確認しながら、コメントを付箋に書き、ワークシートに貼って生徒に返すこととした。

(3) 評価の意義の共有

研究授業後の校内研修を中心に、日彰館にとって評価にはどのような意義があるのかを考えた。一人ひとりの生徒理解をしやすい環境にある小規模校の強みを生かし、固有名詞を挙げながら研修を重ねた。現在形成されている本校にとっての評価の意義は、この生徒が「もっとよく」なるためにどうフィードバックをするのか、ということである。

今年度の成果と次年度の課題（※仮説の検証を含む）

○成果

（1）「のめりこむ学び」について

全校合同の総合的な学習の時間の授業を行うことで、生徒も教員も3年間の学びに見通しと日彰館で学ぶ意義を感じる機会を創出することができた。特に、学びのプロセスに焦点を当てたことで、1年生は2・3年生から、2年生は3年生から学んだことを自分の学びに活かそうとする姿勢が見られた。また2・3年生にとっては、自分の学びを振り返り、意義を感じる機会にもなった。この合同授業の生徒の肯定的評価は84%で、人前で話すことが苦手な生徒が少なくないことを考えると高い数値である。

12月に実施した生徒へのアンケートの「田舎主義（総合的な学習の時間）での学習に、のめりこむように主体的に取り組んだと思う。」への肯定的回答は1年生78.9%、2年生83.6%、3年生65.7%であった。1・2年生が3年生に比べて肯定的回答率が高いのは、授業時数が1・2年生は2単位、3年生は1単位ということもあるが、1・2年生については前述したとおり、学校行事と連動した横断的な学びを展開していることも1つの要因と考える。また、1年生の英検全員受験では、3級以上取得率が63%と、昨年度の48.3%から大幅に上がった。今年度初めて11月の吉舎おもてなしプランの事前学習をプロジェクト学習のフレームに落とし込んで行ったが、主体的に学習に取り組んだ成果を発揮する場である国際交流行事で、コミュニケーション能力向上の必要性を感じ、英語学習へ動機を高めて取り組んだ結果であると考えられる。

（2）「田舎主義評価」について

評価をテーマとした研修を重ねながら、日彰館高校としての評価の意義と在り方が少しずつ形成されていった。意義に関しては、生徒が「もっとよく」なるためのフィードバックであるという位置づけであり、在り方に関しては、小規模校の強みを生かした一人ひとりの生徒理解を伴った評価である。また、前述した評価のシステムを経て、教員の評価に対する生徒の評価、それに対する教員の応答があったり、評価をした後に廊下でその評価についての会話が生まれたりする等、対話的な評価に発展したことも成果である。日常的なやりとりが生徒を成長させるきっかけになると考えている。

○課題

（1）「田舎主義評価」をさらに充実させる工夫

評価ルーブリックを作成し、評価システムを構築したが、評価力が高まっているとは言い難く、各教員の力量次第というのが現状である。研修の際に、良い評価とはどのようなものであるか評価の質を検証していく必要がある。また、生徒の活動を見とる前に、どのような行動があればルーブリックのどのレベルなのかという質的具体性と、今回はどの資質・能力を規準に評価をするのかといった焦点化について、教員間で共通認識を持つことも必要である。

（2）「のめりこむ学び」を広げて深める工夫

どのような状態が「のめりこんでいる状態」なのかを十分に検討しないままプロジェクト学習を進めたため、教員間での共有と他の学びへの拡がり十分ではない。総合的な学習の時間での生徒の主体性の引き出し方を、各教科に拡げていく計画である。設定した資質・能力を活用しながら求める生徒の姿を共有し、内発的学習意欲を伴った学習を具体化・具現化していく必要がある。